

道

michi

大いに神書を読むべし

いままで、本教の宣伝方法としては、浄霊と刊行物の二つによって行われて来たことは知る通りであるが、これからはいま一つ座談会、講演会等を、各地に開いて宣伝するのである。これは勿論耳からの宣伝で、いままでの病氣治しと目の宣伝のほかに、今度から耳の宣伝が加わるわけだ。このように三位一体的の方法によれば、大いに効果の挙がることは、期待しうるであらう。

勿論、耳の宣伝とは言葉によって本教に関する一切を知らせ、いかに本教が優れた宗教であるかを伝えるのである。そうして相手に対し、分からせるためには、こちらにも信仰的智識が豊富であらねばならない。なにしろ聞く者はなるほど救世教というものには実に立派なものだ、いい信仰だ、自分もぜひ入信したいという心を起こさせなければならぬ。そういう場合よく自分はやさべるのが下手だ、どうも巧くしゃべれないなどというが、これは間違っている。というのはいくら巧くしゃべったところで、相手の心は動くものではない。いつもいう通り人を動かすには誠である。こちらの誠が先方の魂に触れる、つまり魂を揺り動かす、それだけである。しゃべることのうまいはずいは二義的である。

以上のように熱と誠で人を動かすとしても、それには充分理解が必要である。とすればこちらにも自己の智識を磨くことで、なによりもできるだけ御神書を読むことである。また質問を受

ける場合が大いにあるから、それに対し一々明確な答弁が与えられなければ、相手は納得しないに決っている。したがってどんなに難しいことでも相手が承知するだけの解答を与えなくてはならない。そうして特に注意すべきは、よく苦し紛れに嘘の答弁をする人がある。相手が激しく斬り込んでくると、心にもない一時逃れをするがこれは絶対いけない。仮にも神の信徒として嘘を吐くなどは許されない。知らないことは知らないと正直に言えばいいのである。ところが知らないというところを相手は軽蔑しやしないかと思つて知つて振りをしたがるものだが、これが最もいけない。そうするとかえつて逆効果になる。というのは、知らないことは知らないという、先方はこの先生は正直な人だから信用ができると思うことになる。いくら偉い人も何でも知つているなんて人は恐らくない。だから知らないことがあつても決して恥にはならないのである。

それから私に質問する場合、御神書のなかにチャンと書いてある事柄がよくあるが、これらは平素まったく御神書を読むのを怠っているからである。だからできるだけ御神書を読むことで、読めば読むほど信仰が深くなり、魂が磨けるのである。御神書の拝読を疎かにするものは力がだんだん減るものである。信仰が徹底すればするほど貪るように、読みたくなるもので、繰り返し繰り返し返し腹に入るまで読むのがよいのである。勿論読めば読むほど御神意がハッキリ判るものである。(後略)



玳瑁天目鳳凰文茶碗 吉州窯 中国・南宋時代（12～13世紀）

MOA美術館所蔵

吉州窯は唐時代以来、中国製陶の一中心地として知られ、最も盛んだったのは南宋時代です。この茶碗のように、内面に鳥の文様があるものをわが国で鸞(らん)天目と呼んでいます。鸞天目は比較的遺品が少ないものです。これにまず内外全面に黒釉をかけ、次いで内面に剪紙細工(きりがみざいく)で作った鳥形などの型紙を貼り付け、その上に藁(わら)灰を混ぜた失透性の釉薬をかけてから型紙をはずすと、その部分だけは釉薬が一重のため、下の黒釉が現れて、黒い鳥文様などが現れます。外側は黒地に黄斑で、この趣きは鼈甲(べっこう)とか玳瑁(たいまい)に似ています。わが国では、江西省の吉州窯の製品を総称して玳瑁天目(たいひてんもく)と呼んでいます。この茶碗は、高台は低く小さく、総体に薄く瀟洒な作りで、焼き上がりの綺麗な優品です。鴻池家伝来。

《目次》

み教え	2
代表挨拶	4
感謝奉告 鈴鹿グループ	10
感謝奉告 藤枝グループ	12
お知らせ	13
【聖地・聖蹟シリーズ】みあとしのびて	14
豊饒祈願の日(箱根)	18
豊穰祈願祭(熱海)	19
感謝奉告 山口グループ	20
感謝奉告 山口グループ	21
感謝奉告 鳴門グループ	22
感謝奉告 一宮グループ	24
シリーズ明主様(37)	27
聖地NOW	30
連載『神と繋がる明主様の食事観』(3)	33

《令和8年 信仰課題》

魂磨き^{たまみが} 心清めて世を救ふ

尊き神業^{みわざ}に励しめよ皆^{みな}

【実践の誓い】

- 1 み教え拝読をさせていただきます。
- 2 参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。
- 3 明主様の救いを拡げていきます。

代表挨拶

西村 正資

桜の薄紅と若葉のもえぎ色。温かな陽光に輝く相模灘と初島。聖地瑞雲郷の景色が鮮やかに塗り替わってきています。心が軽くなり、何かを始めたくなる。歩き出したくなる。春は、理由もなく前向きになれる不思議な季節です。

顧みて遡ること一五年前の三月一日、東日本大震災が発生しました。犠牲になられた数多の霊に哀悼の祈り

を捧げるとともに、今もなお被災の影響に苦しまれる人たちの傷が癒えますことを希うばかりです。

一方、二月二八日、突然アメリカ合衆国とイスラエルによるイラン攻撃が始まり、中東地域は戦闘拡大の危機に包まれています。戦火の犠牲になられた方々の救いをお祈りしながら、ただただ一日も早い戦闘の終結と、平和の訪れを衷心より祈っております。

ここに許されている命を、皆さまとともに感謝し、大いなる夢と希望を語り合い、みんなが笑顔になれるように努めてまいります。

三月一日、箱根光明神殿では『豊饒祈願の日』、熱海救世神殿におきましては『豊穰祈願祭』が、厳かに斎行されました。

ご神前には、豊年満作を祈る“種もみ”が供えられました。秋には、私たちの喜びとともに命の躍動を生み出す実り多き世界が許されますよう、お祈りさせていただきます。

さて、九頁にご報告させていただいたように、当会役員の任期満了（令和八年三月二〇日）に伴い、次期役員の内選が行われ、決定をいたしました。

「明主様と聖地に直結する会」には、若返った頼もしいリーダーが誕生いたしました。

私にとりまして、このような信頼できる後継の方々にお恵まれたことは、当会発足時には想像すらできなかった

奇蹟であり、大きな喜びです。

あらためて明主様に、心から感謝を申し上げました。

今後、新鮮な空気感のもと、新たな信仰体制と組織形態が創造されるものと、今から楽しみにいたしております。

会員の皆さまには、今後も変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げます。

二月号の感謝奉告に学ばせていただきます。

『道』二月号 感謝奉告に学ぶ

東大阪グループのMYさんは、昨年末から年始にかけ、二度も交通事故に見舞われました。

不思議なことに二度とも、神様事に関わる買い物途中でした。痛みは残ったものの、幸い大事にいたることはありませんでした。大変怖い思いをされ、
“何で？”
“どうして？”と、心に湧き起こる疑問を素直に表現されました。

Mさんは、これまでも当機関誌に何度もお蔭奉告をお届けされています。その多くは、人さまのお世話のお蔭奉告が多かったように記憶しています。

ですから私の中では、リーダー的なベテラン信徒と認識しています。

神様、明主様は、私たちが成長すればするほど、大きなご期待を寄せてくださるものと思います。なぜならリーダー

が大きく成長することで、周囲が一層豊かになるからです。

社会も信仰も同じで、人の成長には段階があるように思います。例えば、小学生を育てるには、手取り足取り教えます。中学生や高校生になると、与えられた問題や課題を、自分で解くことが求められます。大学生になると、自分で課題を見出し、新しい領域を切り拓くように期待されます。信仰も同じで、ベテランさんには、強い期待が寄せられ、問題も次第に高度となり、自分で気付き歩むことが求められるように思います。

わが身魂 みたま 磨かんとして大神は みか

まが 枉とふ砥石用ひ給ふも たも

魂は永遠ですから、この世に居ようが霊界に居ようが関係なく、神様は、すべての人に絶えず課題を与えられるのです。時には災いと思えるような厳しい試練を用いて、“何が何でも、この魂を必ず天国に引き上げるぞ！”と、誘われることもあります。

人は“悩んだ分だけ、成長する”とも言われています。み教えの「懷疑」を再度拝読されてはいかがでしょう。今回の難問に、すでに気付かれることもあったようですが、もっともっと求め続けてください。Mさんでしたら“アッ！そうだったのか”と、魂の領域をさらに大きく押し広げていかれるものと信じております。

山口グループのNMさん、同じくTKさんは、昨年二月七日、京都平安郷の月次祭に合わせ「ご奉仕参拝をさせていただきたい」と、二泊三日で参拝されました。仲の良いお二人が声をかけ合いお揃いで、明主様のもとに赴かれたのです。

お二人は、一昨年の秋、当会に入会されました。それまで所属していた宗団では、さまざまなご苦労を経験されたことで、より一層明主様や聖地に対する「憧れ」が強く生まれたことでしょう。明主様と交流し、お力をいただくには、この「憧れ」はとても大切な要素だと思います。心の強弱や熱量とでもいうのでしょうか。恋愛感情に似たものなのです。

ですから、聖地で出会う一木一草、出会う人と人との霊性が一気に重なり合い、光が満ちて、感動や喜び、感謝が溢れ、そしてその姿に明主様も呼応され、強くお働きくださり、輝きを倍増させてお迎えくださったのではないのでしょうか。

お二人のご奉告からそのような印象をお受けしました。

「此処——聖地の土を踏めば良い。此処に来れば良い。
(中略) 此処に来れば、霊界が光ってますから」

(講話 昭和27年7月)

明主様や聖地に慣れてしまい「見失っている大切なもの」を私にも呼び覚ましてくださいました。ありがとうございます。ごさいます。

今ではお二方とも「ただく世界」から「あたえる世界」へと、ご自身の信仰姿勢を高められ、聖地参拝の歓びを語られるとともに、明主様信仰の感動を、周囲にお伝えされる活動をされています。つまり、歓びの伝道師ですね。

私も思い出しました。信仰のお伝えの基本は「教えを伝える」ことも重要ですが、まずは「信仰への歓びの心を伝える」ことでした。ありがとうございました。

今後のご活躍をお祈りさせていただきます。

鳴門グループのMAさんは、派遣社員として家具の組み立てをされています。

慣れない作業に、ミスやトラブルは付きものです。周囲からは怒られ、その度に「もうこの仕事は無理だ」と、心が折れ、辞めようとしても、なぜかそこに留め置かれることになり、悩んでいらつしやいました。

奉告を読ませていただきながら、Mさんの心の痛みや叫びが私にも伝わり、同情をいたしました。

でも、よくぞ踏み留まり耐えてこられました。先生の指導を思い返されているんですね。「明主様にお伺いしてみてください。必ずお応えくださいますよ」と、Mさん

と明主様を優しく繋いでくださっていたのですね。

その先生の指導を、素直に受けとめ「なぜ？教えてく
ださい」と、何度も明主様と対話されています。そして、
毎日み教えを拝読されています。

Mさんの悩みをお聴きになられた明主様は、嬉しかった
のではないのでしょうか。その悩みと考えるものは、明
主様が準備されたMさんへの成長の課題であったはずで
す。明主様からのお応えは、み教え拝読や仲間のお蔭奉告
に示されていたようで、心に「ハッ」という「気付き」
として現れていました。

暗やみの道みち 安やすく行ゆかなむ神かみの書ふみ

案内あなひに誠まことの杖つえつきながら

み教えの「信仰の醍醐味」で「人事を尽くして後は神
様にお任せする」「後は時を待つのである」と、いうこと
でした。明主様からのお声かけと愛をしつかり心に留め、
集会所のご神前で、未熟さをお詫び申し上げるとともに
地獄の想念を引き揚げ「温かな想念」と表現されるよう
に、神様にお任せしたので、天国的な気分へと切り
替えられました。

すると不思議なことに、仕事に出かけることが楽しく
なり、周囲も優しく丁寧に教えてくれるようになったと
奉告されています。「想念次第」でしたね。

良かったですね。明主様がいつも側に居てくださるの
ですね。Mさんと同じような苦しみを抱える方はとても
多いように思います。

明主様とともにある人生、それはまさに怖いものなし
です。その心強さや喜びを、多くの皆さまにお伝えくだ
さい。

ご活躍をお祈りさせていただきます。

淡路グループのKAさんは、信仰二世です。幼い時に
疫癘が流行り、ご自分は重症となりました。医師から見
放され、両親が助けたい一心で本教に救いを求めたそう
です。当時の先生から「子供さんを助けなければ布教し
なさい」と指導され、その通り実践されたそうです。ま
た、明主様に電報を打ち、ご祈願をお願いされました。
そのお蔭で無事回復されたことが、今日の信仰の基礎と
なっているそうです。

すごい話です。我が家の信仰の経過とよく似ていると
感じ、思い出しました。私の布教経験の中でも、何度か
とても厳しい浄化者に出会ったことがあります。そんな
時、KAさんの体験と同じように「自分が幸せになり
たければ、人さまを幸せにしなさい」と、明主様は教え
ています。できますか？」と、伺ったものです。ほとん
どの方は「ハイ！」と返事されました。しかし、実際そ
のように行動された方は僅かでしたが、これはもの見

事に正解でした。私の記憶に残る大きな奇蹟は、ほとんどそのような中から生まれたものでした。

「神様は厳しいな！」と思うこともしばしばでしたが、しかし、これが真実で公平な「大愛」でした。

KAさんは、その後幸せに暮らして来られましたが、先頃、漢方の副作用から全身が浮腫み、歩行困難となり入院、水を抜くと三日間意識のない危険な状況となったそうです。その時、夢か現か両親が現れ「しっかりせよ」と励まされ、背後から明主様が浄霊を取り次いでいてくださったそうで、その後意識が戻り、なんと後の検査では「何も問題ない」ということであつたそうです。これが信仰の不思議さですね。

その昔、KAさんは、明主様とご両親を結ぶ大役を果たされましたが、実際にはご両親が要の役割を果たされたのですね。そのご両親が果たされた信仰を、今度はKAさんご自身に「現わしてほしい」という期待があつたのではないのでしょうか。もちろん今日まで相応に信仰実践をされ、努めて来られたものと思います。でも、先祖さまは「これで良い」と気を抜くことの危うさを一番感じていらつしやるのではないのでしょうか。命を失いかけて明主様によつて「付けたしされた命」です。

私も「自分のものではない命」と、よく自分に言い聞かせています。なかなかそのように思いきれない時もあります。でも「そのように受けとめないといけない」と

いう意識は、いつも心の底辺にあります。

この世は、まだ「修行の場」と意識し、明主様を力に戴き、ともに手を携えてまいりましょう。

きつとKAさんの働きかけを待っている縁ある方が、現界にも霊界にもたくさんいらつしやるものと思います。例えささやかな一灯であっても、周囲全体を明るく照らします。明主様の代理人として、そこにお使いいただけたら、どんなに幸せなことでしょう。

お祈りさせていただきます。

代表退任のご挨拶

挨拶の前文にてご報告させていただきましたが、当会役員の任期満了に伴い、選出された次期役員名簿の告知をいたしました。

私事で大変恐縮でございますが、当会規則における役員定年の年齢が次期役員任期中に抵触することから定めを遵守するとともに、後進に道を譲る必要を感じ、役員（代表）選考対象から、ご辞退をさせていただきました。

平成三〇年、元主之光教団の混乱から始まった当会の歩み八年、わずかな期間でしたが、初代代表則武克明先生とともにご神業にお使いいただき、そして多くの皆さまも馳せ参じてくださり、心から同志と呼べる皆さま方と、信仰をとにもすることができました。振り返れば、

その間数限りない奇蹟を許され、励ましやお支えをいただいたことは、生涯忘れ得ぬとても幸せな経験でした。

顧みますと、「聖地直結の会」の組織の整備充実発展という面につきましては、信徒の皆さまのご期待に充分沿えなかったこともございました。この場をお借りして、心よりお詫び申し上げます。

この度の教団浄化の中で、私は、ひたすら明主様を見つめ求め、さらに明主様に倣おうとされる信徒の皆さまのお姿に感動し、多くを学ばせていただくとともに、信仰の確かさや、み教え実践の尊さを肌身で感じとることができました。

そして「明主様を一途に見つめ歩む者は、決して見放されることはない」という信念を、さらに強くいたしました。

今後は、一信徒として雄々しく胸を張り、信仰の王道を皆さまとともに歩ませていただきたいと願っています。大神様、明主様はもちろんのこと、包括法人世界救世教役員会、東方之光、いづのめ教団には、言葉に表し尽くせないほどのお支えをいただきました。そして、同志として集いともに歩んでくださった皆さま、すべての方々

に心より感謝を申し上げます。

ありがとうございます。

皆さまのご健康とご活躍を、心よりお祈り申し上げます。

世界救世教 明主様と聖地に直結する会

(聖地直結の会)

第四期執行部決まる

去る二月二八日、役員選考委員会において、左記の通り当会の第四期役員が決定しました。

【役員】

代表	責任役員	立石 博
	責任役員	今江 孝夫
	責任役員	門埜 敏春
理事	理事	吉原 佳予子
理事	理事	和田 博
理事	理事	東本 昌也
監事	監事	木場 信幸
監事		武田 安広

平安郷参拝から始まったご守護

鈴鹿グループ TS

昨年五月 平安郷の参拝をお許しいただきました。

“足が痛いのに参拝できるだろうか”と心配しながら京都に向かいました。早く着き過ぎてしまいました。先に参加させていただこう”と痛い足をかばいながら、研修センターに入りました。

その時、偶然にも西村代表との面談が許されました。「今の足ではいけないから治せばいいのだよ」という内容のお話をいただき、私も“足が治ったらご用にお使いいただける”と思いつつも、怖くて決断しきれなかった手術を受ける決心が固まりました。

それから病院の紹介状を携え診察を受け、半年先に手術が決まりました。

それからは、ずっと毎日遠隔浄霊をしてくださっていたTMさんにお世話になって、励ましていただいたり、いろいろ明主様をお願いして行くことを教えていただき、手術予約の日を待ちました。

そして聖地への上納報告の折には、近況報告をさせていただきます、聖地からも毎月励ましのメールが届き、ご祈

願もしていただきました。

そしてその度に明主様にお任せして、心が“ふわり”と楽にならせていただきました。

足も痛いのですが、聖地でご祈願していただける安心感、聖地への感謝の気持ちを感じつつ過ごすことができました。手術の日までは、一日一日が辛くて辛くて、痛い足をかばいながら、ご浄霊をいただき過ごす毎日でした。それなのに、手術までには多くの浄化が待ち構えていました。

突然肩から先が動かしにくくなり、肩の激痛と痺れで、手はポンポンに腫れてしまい、指も曲がらず、始めは手の痺れのためペンも持てないほどになり、「頸椎圧迫」だとか「リウマチ」だとか、さまざまな病名をつけられ、いろいろなお薬が出されました。また首回りが痛くなって検査したところ甲状腺に腫瘍ができてることが判明し、ついには坐骨神経痛で靴下も履けない状態になり、自由が効かなくなってしまう、要支援2と認定されました。

何もできない私に代わり、主人は嫌な顔一つもせず家事のすべてをしてくれ、ご浄霊はもとより、私の衣服の脱ぎ着せまで世話してくれる日が続きました。私にとっても主人にとっても、すごく大きなご浄化でしたが、私たち夫婦を大神様、明主様が、大きく守り包んでくださいました。聖地の先生方、太田先生、グループの皆さま方のご祈願、ご浄霊により、大神様、明主様の愛に包ま

れて過ごすことができました。

長い間「おひかり」をかけなかった子供が、「おひかり」をかけ、何度かご浄霊を取り次いでくれました。

嬉しいことでした。

主人は、術後も家から病院まで往復約五時間ほどかけ、毎日のようにご浄霊を届けに通ってくれ、病院から帰宅してからも一時間から二時間の遠隔浄霊をしてくれ、主人の優しい心と強い信仰によって、私のすべてを支えていただきました。

アレルギー性の体質である私は、病院の先生から「抗生物質を使うので覚悟がいます」と言われていましたが、お蔭さまで難関の人工股関節手術も、皆さまからご祈願と、ご浄霊をいただいで無事乗り越えることができました。

まだ手も肩も自由に動かすことはできませんが、神様から薄紙を剥がすようにご守護いただき、良い方向に向かっています。

手術してくださった医師も有名な先生なので、入院中には「今決断しても、診察に一年待ち、手術になると二年待ち」と聞かされました。半年前の平安郷参拝の折、西村代表にお会いして勇気をいただいでいなければ、このように順調なタイミングでの手術は受けられなかったと思います。それだけに大神様、明主様の大きなご守護と感ぜずにはおられません。

これからは、少しでも神様のご用が許されますように、前を向いてたくさんのご守護のお礼が許されて行きますように、主人と生きて行こうと思います。

また今回、いづのめ教団四日市浄霊センターの皆さまにもたいへんお世話になりました。本当にありがとうございました。

家から二、三分のところにあるセンターに、はじめは自然食を求めて行き始めたのですが、センターの方たちからは、「同じ救世教やんか」、「救世教はひとつやに、同じやに！」と大きな広い信仰心で受け入れてくださり、参拝させていただきました。迎え入れてくださった佐野先生や、センターの皆さま方からも、たくさんのご祈願、ご浄霊をいただき感謝が尽きません。

二月一日に、無事退院させていただきました。ちょうどその日も、センターでは佐野先生と皆さんが、私のことを祈願してくださったそうで、退院の喜びとともに、もう一つ感謝を重ねて退院が許されました。まことにありがとうございます。

想念の大切さを知らされて

藤枝グループ M H

癌を患い、緩和治療で長年自宅養生していた主人が、昨年春に、浄霊に感謝しつつ、穏やかに旅立ちました。二人の子供は遠方に住んでいるため、一人でこれからのように生活したら良いのか”と、悩み落ち込むことが多くなりました。

昨年末、不安で落ち込んでいる時、婿むこの転勤で海外に住む娘よりラインが入りました。その内容は「子供が胃腸炎になり、夜中吐き続け、下痢もしていてとても心配。早く日本に帰りたい」というものでした。

今年の一月半ばには、日本に帰国することが決まり、厳しい海外生活も終わるという矢先の出来事でした。すぐにご神前で祈願をさせていただきました。そして自分が海外生活した時、やはり同じような体験をし、「浄化作用」のみ教えに支えられたことを思い出し、娘に伝え、落ち着かせました。

ところがその数日後、娘の体調も悪くなり、心配した娘婿が検査しようと病院に連れて行きました。結果は、なんと「 Dengue 熱と腸チフス」の陽性が出て、即入院と

なりました。娘からは、不安ですがるようにご祈願を依頼してきました。

どちらも命に関わる重い伝染病で、心配ばかりがつってきました。とっさに元旦に姉から送られてきた聖地救世会館二階正面に掲げられた明主様のお写真を思い出し、ラインで「苦しい時、この写真に向かって、明主様助けてください」とお願いしなさい」と伝えました。そして、自宅のご神前にお玉串をお捧げし、天津祝詞を奏上した後、娘の方角に向かって浄霊をさせていただきました。

翌日には、聖地直結の会に聖地祈願をお願いしました。また、主人の墓参りに行き、その後グループの世話人である兄のところへ寄り、一緒に祈願をしていただき、浄霊も久しぶりにいただくことができました。私自身も随分落ち着くことができました。

翌日、聖地に祈願参拝させていただこうと、直結の会にも伝えました。

その日の夜、娘から連絡があり「再検査したところ陽性と診断されていた二つの伝染病がいずれも「陰性」になった」と、そして「点滴を打って、少し楽になったから、これから帰宅します。お騒がせしてごめんね」ということでした。

ビックリするとともに、あまりに早いご守護に、何をどう表現して良いのか分からないままに、感謝感激でした。すぐ聖地にお礼の報告をし、自宅でも参拝させてい

いただきました。

以前、「道」のみ教えに、「霊線」があつたことを思い出しました。私の心配執着が混乱を大きくしているようにも思え、「何があつても想念をしつかりしなければ」と思いました。

一月中旬、無事娘家族揃つて帰国することができました。娘にとつても帰国できるかどうか、ぎりぎりの出来事で、とても感謝しておりました。

この度のことで、どんなに辛いことも、大神様、明主様にすぐ祈ることができ、ご浄霊もいただける。一人になつても、こんなに心強いものをいただいているんだと痛感し、心より感謝させていただきました。

また、親の想念が子供に通じるということを感じ、「私がチャンとしなければ」と心より思った次第です。ありがとうございます。



瑞雲郷のベニバナアセビ

【おしらせ】

九州合同月次祭

4月5日(日)、田川布教所にて、九州地域合同の月次祭を開催します。

当行事の詳細については、田川布教所もしくは、本部事務局にお問い合わせください。

多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

【おしらせ】

全国信徒集会

5月17日(日)11:00～13:00

平安郷研修センターにて、全国の信徒を対象に信徒集会を開催します。

詳細は、決まり次第ご案内させていただきます。

多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

神仙郷 庭園

神仙郷は、明主様が「地上天国のひな型」を表す理想郷としてお造りになられた庭園です。

昭和一九年五月、明主様が東京・玉川の宝山荘から箱根へ移られたことを機に造営が始まりました。

当時この地は雑木や熊笹が生い茂り、岩が散在する荒地でした。さらに第二次世界大戦中から戦後の混乱期で資材も不足していましたが、多くの信徒の建設奉仕により工事は進められ、昭和二八年に完成しました。

神仙郷は、箱根強羅の自然環境を生かした独特の庭園構成を特徴としています。庭園内には箱根美術館をはじめ、神山荘、観山亭、日光殿、山月庵などが配置され、庭園景観とともに日本の美と文化を体感できる空間となっています（これらの建物については次回以降に紹介します）。

作庭にあたって、「神苑の一石、一木、一草たりとも、皆私の指示によらぬものはない」と仰られたとおり、細部まで明主様のご構想とご指示が貫かれており、こうして造られた神仙郷は、箱根の自然と人の創意が調和した庭園として高く評価され、令和三年三月には国の名勝に指定されました。

神仙郷は、明主様の理想と思想を形として示す庭園として、今日まで大切に守り伝えられています。



■ 苔庭

昭和27(1952)年完成

約130種類の苔を敷き詰め、そこに220本を超えるモミジが配されている。新緑輝く春。苔の緑とモミジの紅が映える秋。雪化粧の冬。季節によって多彩な表情を見せてくれる。



木曾檜の太鼓橋



苔庭の北側を流れる溪流



■ 萩の道

昭和22(1947)年完成

萩の家の移築に合わせて作庭された。蛇行する階段両脇の岩組の上に、ミヤギノハギとモミジが植えられ、紫と白の枝垂れる枝葉のトンネルをくぐるように演出されている。



■竹庭

昭和26(1951)年完成

箱根美術館本館から別館へと続く園路と階段の両脇に孟宗竹を植えた竹庭は、一ヶ所にまとまって生えていたり、飛び飛びに生えていたり、変化をつけている。

■石楽園

昭和24(1949)年完成

神仙郷の中央に位置し、巨大な岩石群と溪流が織りなす。明主様が強羅の土地を入手後、最初に手がけた庭園で、岩もすべてご自身の指示で並べられた。



石楽園から早雲山を望む



振り返ると明星ヶ岳が迫る



■芝庭

昭和25(1950)年完成

芝庭は日光殿南側に位置する。西側を見上げると、神山荘の茅葺屋根、その前庭から流れ落ちる滝と豊かな植栽、背後の早雲山と一体となった景観を望むことができる。

■大池・龍頭の滝

昭和24(1949)年完成

大池は日光殿の西側に位置し、神山荘前庭との高低差を利用して造られている。龍頭の滝の名称は、観山亭から流れてきた水が稲妻のように落ち、先端が二つに分かれ龍の髭のように落下することから名付けられた。



龍頭の滝



大池から神山荘を望む



明主様のご守護に感謝し、ご神業奉仕の上に豊かな実りが結実



着々と進む光明会館建設

土が結ぶ新たなお神縁

(箱根) 豊饒祈願の日

3月1日、光明神殿にて「豊饒祈願の日」を齋行。中島MOA理事長は、光明会館建設の意義を示しつつ、世界の霊的中心から奉仕する大切さを強調。ロデール研究所、チェン医師のチーム、MOAの連携に触れ、「土と作物と人の健康のつながり」の理念のもと、農業が人や環境に及ぼす影響について研究すると発表した。この理念は、清浄な土から育つ作物を食すことで心身の健康を保つとのみ教えに基づくことを解説。さらに、若い世代や地域に広がる実践に触れ、み教え「幸福の秘訣」に基づく生き方で、「心身ともに健康な人づくり、まちづくり」を進めると語った。



種籾や野菜の種を供え、五穀豊穡と自然農法の発展を祈念。ご神業への邁進を誓った



雛人形が拝観者を迎える水晶殿



明主様を求め、心ひとつに祈る参拝者

(熱海)豊穡祈願祭

21世紀的文化人を目指して

3月1日、救世会館にて豊穡祈願祭が執り行われた。杉原いづのめ教団理事長は、み教え「新人たれ」を紐解き、明主様ご自身を例に、常に進歩向上を心がけ人格向上に努める大切さを強調した。また、明主様が示された「21世紀的文化人」とは、この世は神が主となって導いておられると素直に受けとめる人であり、その心に立てば自己中心は利他へと転じ、周囲を照らす光となって唯神思想を広げていく存在だと強調。日々新人たることを心がけ、愛と慈悲の心言行を大切に、浄霊を取り次ぎ、信仰の喜びを伝えていきたいと述べた。

感謝奉告

ついに「ご浄霊を許されて

山口グループ HS

昨年元旦から、明主様と聖地に直結する会の一人としてスタートさせていただき、一年を迎えることができました。

昨年は、聖地平安郷で執り行われた全国信徒集會に、同居する娘と孫娘とともにご参拝をお許しいただきました。喜びも束の間、娘の主人が、病院に運ばれ、あわや命に関わることを救われましたが、少し後遺症が残りました。私自身の身体のこともあり、突然のこの出来事に、これから先のことには不安を感じました。しかし、不思議と「神様が何とかしてください」という、冷静な私がいきました。そして、ありがたいことに、娘も信仰的に受けとめてくれました。思い切つて、いろいろと起こる出来事も、それに関わる人たちの姿も、そこから湧きおこる私のさまざまな想いも、そのすべてを、「明主様のみ心の現れ」と受けとめてみようと思われました。すると、退院が近づくにつれて、娘の主人の後遺症がなくなつてしまいました。また、溝ができていた娘たちとの関係も一瞬にして解決してしまいました。こうした一連の出来事を通して、「神様がいらつしやる」「神様がお見通しだ」という確信とともに、「温かな想念」によつて導かれる一年を過ごさせていただきました。

初めは私の住む地域の信徒は一人だけでしたが、この一年の間に、私の家の近くにおられる担当の先生の叔母様や弟さんも、当會に所属されていることを知り、すごく嬉しく、安心しました。

そして、ついに、今は所属が違いますが、昨年何度か会っていた、明主様を信じる信仰をしている友人と、正月も落ち着いた一月の初め頃、久々に会い、ご浄霊をさせていただくことができました。

私は、数年前大きなご浄化をいただき、以前のように身体が動かせません。でも、聖地に結ばれ、一年が経ち、短い時間でしたが、ようやく私にも「ご浄霊をさせていただく機会を、明主様が与えてくださいました。

ご浄霊の後、友人は「やっぱり違うね」と私の家を後にしました。嬉しくてたまらなく、担当の先生にラインで報告させていただきました。すると、先生から電話があり、私の嬉しさを一緒に味わってくださいました。

また、私は昨年、突然神経痛が発症し、息もできないほどの痛みが続く時もあり、朝晩お薬を使っていました。このお薬は強めのお薬なので、お医者さんも「副作用もあるから気をつけて、その日の状態を見ながら、自分で考えながら使えば良いよ」と言ってくださっていました。しかし、今年になつて朝晩毎回使わなくても痛みが起こらなくなり始めています。お医者さんとも相談しながらだんだん減り始めています。このことも、先生と一緒に味わわせていただきました。

さらに、先日、選挙の事前投票に行った際、長い行列に並

び、投票後、お手洗いに向かい扉を開けた途端、思わぬ人と出会うことができたのです。リハビリでお世話になっていた方で、出産と育児のため休暇を取られ、そのまま一年ほどたち、私も「会いたいなあ」と思っていた方でした。

昨年のご奉告で申し上げていた方です。いよいよチャレンジする機会が巡ってまいりました。ここを離れることになるので、一度会ってお礼がしたいと思っていた方の一人でした。もし行列に並ぶことがなく、スツと終わっていたら……、お手洗いに向かわず帰っていたら……、おそらくお会いできることはなかったと思います。不思議な巡り合わせに、明主様と祖霊さまのご存在を感じずにはおられません。もちろんこのことも先生と一緒に味あわせていただきました。

昨年のご奉告で「いよいよチャレンジする」と申し上げました機会も巡ってまいりました。今年は去年とはまた違う一年を、楽しみながら、過ごさせていたただきたいと思えます。明主様ありがとうございます。

感謝奉告

喜びを分かちあう道へ

山口グループ

MY

昨年は、命に関わりそうな船の事故を免れたことから始まり、地上天国祭に合わせ、箱根神仙郷、熱海瑞雲郷へ約一

〇年ぶりとなるご参拝が許されましたこと、その後、帰省する娘の車が悲惨事に遭うところをお守りいただいたこと、そのことで娘に信仰継承の話ができたこと、「ともに聖地へ」のひと声がかけられましたこと、いろいろなことがありながらも明主様のみ心の中で、過ごさせていただいた一年でした。

日々「世界救世教とは——明主様の御教えに求めて」と「明主様に倣いて」を拝読させていただき、会誌「道」からは、具体的な営みを集会で、担当の先生や参加される信徒さんと学ばせていただき、この喜びやみ護りを、今度は「明主様にお喜びいただけるよう、誰かのためにお使いいただける一人にならせていただきたい」との思いで過ごさせていたただいていました。

年明けの集会、私の住む町内や組合のことを、いろいろと話す機会をいただきました。思うこと、感じることを洗いざらい話す中で、明主様は私を、そして先生や信徒さんを、ともにお導きくださいました。

私たちのグループでは、当会の令和八年実践計画書のみ教え、お歌、具体的な実践を柱に、「世界画の完成」「神の芸術」の二つのみ教えと

「明主様と聖地(心一つ)に直結する(結ばれる)道へ」というテーマから、

①「明主様」と距離のないところまで、み教え・事実を求める営みを、日々の暮らしの中で実践し、積み上げ、

②「神性人間」を目指して、信仰を深める努力を重ね、人格向上、完全なる人間の道を歩み、

③ 「神がある」ということを認め、「神様が見通しだ」ということを知り、唱え、「温かな想念」でもって浄めていく。という、三つの具体的営み、

「温かな想念を大切に魂の活動(魂活)信仰の革正」というテーマから、

・すべての人が明主様とともにある、だから、

「私たち一人ひとりが明主様のみ心の中にあります」

・すべての人が明主様にお仕えしている、だから、

「誰もが明主様のみ手足、お道具として生かされている」

・すべての人が明主様の光と愛に包まれるように、だから、

「世界のすべては明主様のみ心の現れである」

という、三つの具体的な営みを大切に、スタートしました。

以上の事柄を柱に、年明けの集会で皆さんと学びを深めさせていただきました。その数日後、話題になっていた町内の責任者が、私宅に来られ、昨年から伺っていた体調のこと、今後のことをお伝えいただき、補佐を務めている私との引継ぎなども含めた話となりました。

その際、この方と同じご浄化の感謝奉告が掲載されている「道」をお渡しして、信仰のご案内をする機会を許されました。明主様と聖地に結ばれるお祈りをさせていただき、同時に、この方の健康をお祈りしながら、前に進ませていただきたいと思っております。

明主様からいただいた喜びを、明主様にお喜びいただける道へと導いていただき、まことにありがとうございます。

感謝奉告

自己都合から世界愛へ

鳴門グループ OK

昨年、和田先生が鳴門グループラインにおいて、明主様のみ教えを一日も休むことなく三六五日、「今日のみ教え」を送信していただきました。拝読する度に多くの学びをいただき、浄化をお受けした際には何度も読み返し、日々の生活の糧として歩ませていただいております。

「今日のみ教え」の配信は、昨年の一年限定と聞いておりましたので残念に思っておりましたが、本年に入り、明主様のお歌を毎日送信くださるようになりました。「継続は力なり」と言われるその尊い営みをお許しくださっている明主様への感謝とともに、お世話くださる先生への感謝の念が、日に日に深まっております。

今年の当会の目標の一つに、グループの信徒数を一名以上の増加を目指すがありますが、昨年末、入信希望者が現れ、今年の一月に入信教修を受けられ、二月二二日、グループの感謝奉告祭に合わせて入信式をお迎えしました。とてもありがたく、嬉しく思っております。

この度の入信は、もつと何か大きな意味があるのではないかと、高みを望む自分があることに気付かされました。"これはいったい何なのでしょうか"と明主様にお伺い申し上げました。

そうしますと、『本来観音力で病気を治すのは、病気を治すのが目的でない。信者を増やす上においてするので、病気の治ることを知らずのみでなく、観音力の偉大さを知らずんであります。そして、観音信者を作ることが観音運動を拡げて行く、その最後の目的は大光明世界の建設で、そのための病氣治しであります。そういう目的ですれば、いくらでも病人が来る。観音様が連れて来られる。病氣治しが主となると、病氣も思うように治せず、病人も来なくなる。大光明世界建設のために信者を作る。そのために観音様を祭らず、祭らずうえにおいて観音力を知らず、観音力を知らずために病気を治すので、それが病氣治しが本位になると病氣は治らなくなり、収入が少なくなる。収入を得ることを本位とすると収入がなくなる。そういうような大きな目的でなければならぬ。観音様をお祭りして順調にゆくべきものが、ゆかなくなるのはどうか間違ったことをしているのですから、よく考えると、必ずその点がありますから、そこを改良するとまたうまくいく。その故障のことも大きな見地からみればよく判る。それがはつきりと気がついて判るようになった人が、身魂の磨けた人であります』とのみ教えに気付かされました。

今までの私は、『発展したい、どうしたら自分がもつと向上できるのか』と考えておりました。しかし、常日頃から先生に、『Oさん、とにかく物事を大きく捉え『世界愛』にしてくださいね』と言われたことを思い出し、このみ教えと照らし合わせてみました。

そうすると、どこまでいっても自己都合になっている自分

がいることに気付かされました。『あつ、これではどこまで行っても堂々巡りだし、同じことを繰り返しては明主様に失礼だ』と強く思うようになりました。どこまでも『明主様のみ心の現れ』でなかったら『まだまだ善悪正邪の心の世界で、光と愛という魂の世界では生きていけない』と反省させられました。そのように気付かされ、明主様に感謝申し上げます。すると、徐々に歯痛の浄化をいただきました。すでに歯が抜けた部分の痛みでした。『今までにこんなことはなかったのになぜなのだろう』と思いました。すると、三〇年前に右目を失眼するという大きな浄化をいただき、頭を切開する手術を受けたことが思い出されました。その当時、薬を多量に摂取していたことにも気付かされ、その当時の薬毒が、今出てきたのかとありがたく思いました。そして、この歯痛の浄化を通して、同じように悩み苦しまれていた方々の浄化のお手伝いもしているのではないかと思えるようになりました。

この気付きは自分にとって大きな転換点だと思えました。以前の私であれば、痛みだけを捉えて、『明主様のみ心の現れ』などと思う余地もなかったと思います。この度すべてにおいて、『明主様が私をお使いくださっている』との感覚があることに、はじめて気付かされました。この感覚は、信仰生活数十年、全くなかった『新しい感覚』です。これが、真の安心立命のひとつなのだと思うことができましたし、これが先生のおっしゃる『温かな想念』によって導かれる世界なのだと思います。この度の入信式を通して、大きな学びを賜りました。明主様、まことにありがとうございます。

明主様を見つめて50年

一宮グループ

K T

私は、入信して50年が経過しました。入信のきっかけと家族の浄化、またこれまでいただいたご守護について報告します。

世界救世教との出会いは、37歳の時です。ある日、同級生のG君に出会った時、彼の右頬が大きく紫色に腫れていたの、聞くと、「奥歯に菌が入り骨膜炎」だと言うのです。「医者に診てもらったが、治療はしていない」と言います。二週間後に会うと、右頬はきれいに治っていました。「大神様に救ってもらった。浄霊で膿がたくさん出て治った」と言うのです。「大神様とは何？」と聞き返すと、「大神様の所に案内するから、そこに行けば分かる」と言われ、数日後案内してもらうと、



Kさん近影

そこは広い大きなお屋敷で、世界救世教十方教会という表札がありました。ご神前でご参拝し浄霊をいただきました。その後、「箱根と熱海の聖地参拝に行こう」と誘われ、正月休みの昭和50年1月2日、観光旅行気

分で、G君と六人の信者さんとともに、新幹線に乗り、光明神殿・箱根美術館とお庭・奥津城・祖霊舎に、熱海では救世会館と水晶殿に行き、初めて目にする聖地の偉大さ美しさに感激したのを覚えています。帰りの新幹線車内で、一緒に行った信者さんたちから入信を勧められ、聖地の感動が自分の心を動かしたのでしょうか、気軽に「入信します」と返事したのです。三日後の昭和50年1月5日、十方教会新年祭で「おひかり」を拝受しました。入信後は、誘われるままに教会の月次祭に参拝し、また世話人さんのお宅での集会参加、自宅では浄霊とみ教え拝読に取り組み、一年後にご神体奉斎が許されました。

昭和50年に三男Yが誕生しましたが、3歳10ヶ月の時に、「骨髄性白血病」と診断され、名古屋市立大学病院に入院。医師から「この病気は大人の病気で子供の場合99パーセント助かるのは難しいので覚悟してください」と言われ、治療は抗がん剤投与とB型血液の輸血です。保存血液は使用せずに提供者の血液を病院で採血し、ただちに患者さんに輸血することになります。「毎週B型血液を二〇〇CC一本、Kさんの方で準備してください」と告げられました。早速B型の血液提供者探しに、父は会社仲間や交友関係の方に、私たち夫婦は親戚や友人、また家庭集会の場で頭を下げて信者さんにお願ひし、数人の方から血液をご提供いただきましたが、医師から毎週一本では足りないので毎日一本と言われ医師と喧嘩にもなりました。七月、聖地祖霊大祭にご参拝し、その折にお供物の落雁をいた

だきましたので、Yに渡しますと、喜んで美味しそうに食べてくれました。数日後、地区長さんの紹介で県本部次長に浄化の報告電話を入れました。次長は厳しい浄化を心配してください、「重大な浄化の時には、家族の心が一つになって取り組めば答えが出る」と言われましたので、早速父親に次長から言われた通りの言葉を伝え、「Yのために家族と一緒に祈願し浄化したいので、お父さんも『おひかり』をいただいでほしい」と懇願しましたら、父も素直に了解し「おひかり」を拝受してくれ、早々に父は病院でYに浄霊を取り次いでくれたのです。父が病院に行った2日後に一〇〇〇CCの血液を頸動脈から入れ、6時間かけて太腿から出血させる大手術が行なわれました。翌日担当医師から「大がかりな手術は成功しました。Y君の白血病は治りますよ」と報告がありました。医師の言葉を聞き、奇蹟が起きたと思ひ、感動感謝で涙が溢れました。

血液交換治療の次は骨髄移植です。「同じ遺伝子の型はおよそ三万人に一人です」と言われていましたが、家族全員の検査をしたところ次男の遺伝子がYと同じ形と判明し、再び「奇蹟がいただけた」と思いました。次男は喜んで移植に賛同してくれ、移植手術が始まりました。六百箇所から注射器で骨髄液を吸い上げ、点滴でYの身体に移植したようです。「手術後の夜は激痛が収まらなくて眠れなかった」と次男が語っていたことを思い出します。

移植も無事に済みましたので外出の許可をとり、県本部の月次祭にYを連れてご参拝に行き、大神様にご守護の御礼を

申し上げ、信徒の皆さまに今回の浄化報告と、献血やご祈願、また浄霊訪問の御礼を述べましたが、涙が溢れて言葉になりませんでした。

Yの入院中は妻が付き添い、私は仕事を休んで連日浄霊を取り次ぎに行きました。愛知県本部からは水谷先生はじめ、学生リーダーのM君は1ヶ月間毎日浄霊に来てくださいました。また信者さんたちから輸血のご提供もいただけ、信者の皆さま方の愛と真心によって、10ヶ月後には退院という大きなご守護がいただけました。

世界救世教に入っていないなかったなら、全く違った結果が出たと思います。ありがたいお救いを賜りました。

退院後は小学校中学校と、休みながらの学校生活でしたが学校側の理解と受け入れにより、お蔭さまで無事高校まで進学でき、卒業後には会社勤めもできましたが、テンカンの治療に10年余り病院通いをして、会社にご迷惑をおかけしました。また35歳の時に転倒が原因で脳腫瘍が発見され再び入院です。頭蓋骨に穴をあけての手術や難しい治療を受け数年入院を繰り返しました。目に見えて体力が衰えて行く中で、髄膜腫がんと診断され、医師から余命半年と思われるので、ホスピスへの入院を勧められました。本人の希望もあり、我が家に連れて帰り看病することにしました。親子兄弟一家みんなが揃って食事をともしたり、兄たちが面白い話をしてくれたり、一緒にテレビを観たり、短期間でしたがY中心の和やかで笑いのある時間をともにすることが忘れられませ

ん。平成28年9月、Yは私たち家族と親友が見守る中、静かに安らかに42歳の若さで亡くなりました。

もともと病院から99パーセント助からないと言われたのが、42年間も生命がいただけたのです。大神様、明主様がYの生命の継ぎ足しをしてくださったとしか考えられません。子供との別れは言葉にならない悲しさ寂しさがありました。ここまで生かされて来たことは、献血をはじめ、ご祈願また浄霊をお取り次ぎくださり、支えてくださいました多くの方々の真心とお世話のお陰です。心から深く感謝いたしております。

Yの五十日祭も終え、気持ちを立て直して信仰活動を再開しました。県本部月次祭へ信者さんを車に乗せてのご参拝や、男子会の活動と宿直奉仕また家庭集会への参加、浄霊お取り次ぎ、世話人のご用にも取り組ませていただきました。

廻りますが、父は平成10年に他界する少し前のある日、私に向かつて一言「良い宗教に入って良かったな」と言ってくれました。日頃偏屈で頑固者で、優しい言葉を言う人ではありませんでしたので、一瞬驚きましたが嬉しかったです。世界救世教を認め、浄霊を認めてくれた言葉です。この言葉は私の心から消えることなく、いつも私を照らし生きる力となっています。

父から会社経営を引き継いだのは28歳で、母も妻もそしてパートナーさんも一生懸命に働いてくださいました。経営は薄氷を踏む思いの連続でしたが、何とか会社経営はできました。時代の流れで外資系企業が進出した影響を受け、小さな繊維会社は倒産です。私の会社も平成20年、71歳の時に閉鎖しました。

Yの死から5年経過したある日、妻の体調が悪く、病院での検査結果はパーキンソン病と診断されました。自宅での療養と病院での治療の往復を重ねましたが、誤嚥性肺炎をおこしたことが原因で、令和6年11月3日、81歳で亡くなりました。妻は、結婚当初から愚痴や泣き言は一切言わず家事と子育てに、また朝早くから家業を手伝う働き者で、その上に難しいわがままな舅姑に素直に仕えてくれました。妻と結婚できたことは最大の幸せでした。妻が亡くなり早速聖地の祖霊舎に祀っていただく手続きをとり、大島先生には毎十日祭毎に来ていただき、五十日祭終了の日に、苦勞をかけた妻に報いるためと、霊界での救いを願い、妻の永代祭祀を申し込みました。

最後になりましたが、6〜7年前から所属していた教団のようすが大きく変わりました。特に明主様信仰ではないことが語られ、祝詞も奏上しない浄霊もしない教団なら、もう信仰を辞めようと考えていましたが、いち早くAMさんから、「明主様信仰の道を歩むなら私が支持する聖地直結の会にながりなさい」と強くアドバイスをいただきました。Aさんのお導きのお陰で明主様信仰の道を踏み外すことなく、今まで通りの信仰生活が許されていることに深く感謝しています。これからも明主様を見つめて信仰していきたいと願っています。祈願参拝で皆さんに会えることと、大島先生とA日さんが毎月訪問してくださるのが楽しみです。

ありがとうございました。

神機到来 「内外の嵐」

そのような社会情勢の中で大本は思想運動に力を注いでいたが、教祖はすでに記したように、苦しんでいる人を具体的に救うことこそ大事中の大事であるとして、人助けのための病氣治しに専念していた。また、請われるままに、お守りやおひねりをみずから作って信者に与えた。しかし、大本機関紙の配布でも、教祖の大森支部はいつも群を抜いて、目覚ましい成績をあげていたのである。これらのことが混じり合って大本内の幹部や信者の一部は、教祖に対し誤解や偏見、嫉妬などの悪感情を日増しに強めていき異端者扱いを شدした。やがてこれらが、教祖排斥の動きとなって燃え上がってくるのである。

昭和六年（一九三一年）三月中旬のこと、教祖がおひねりを出していることが大本本部の耳にはいった。そのため、幹部の一人がみずから麴町半蔵門前の麴町分所に出向いて来て、満座の中で教祖を詰問するという事件があった。大勢の信者の面前で教祖を罵り、そのうえ、教祖の作ったおひねりを火鉢にくべて燃やしてしまったのである。

その場に居合わせた弟子の一人は、その模様を、つぎのよ

うに話している。

「その時の教祖様は、信者の前で恥をかかされ、まったくお気の毒でした。しかし、じっとこらえて一言も言われませんでした。」

おひねりに端を発した波乱はこれで収まるどころか、翌七年（一九三二年）には、ますます拡大する様相を呈した。この年の二月一日のことである。大本信者の吉川という青年が大森の教祖宅を訪れた。吉川はもと共産黨員であったが、後に転向して入信、半年ほど前から教祖の知遇を得て、ときおり、大森へ遊びに来ていた。形相に凄みのある男で、共産党時代すでに相当人から恐れられた人物とのことであった。しかし、この日の彼は、常日ごろの友好的な態度とは打って変わって、

「大事なお守りやおひねりを、岡田は勝手に信者に与えている。大本の秩序を乱すけしからん人間であるから、場合によっては殺してやろう。」

と、勢い込んでやって来たのであった。

吉川は教祖に向かい合うなり、短刀を抜いて畳に突き刺し、「よすか、もしよさなければやつつける、返事をしろ。」と凄んだ。教祖ははっきりと、

「よすことはできない。」

と突っぱねると、いよいよ、いきりたつてにらみつけるのである。ところがその時、今まで居丈高に構えていた吉川がにわかには腹をおさえて、のた打ち始めた。

「どうした。」

と教祖が尋ねると、

「腹が痛くてしようがない。」

と苦しさに喘ぎながら言うのである。そこで教祖は、

「治してやるから横になりなさい。」

と寝かせて浄霊をした。やがて痛みが治まると今までの態度は一変して、吉川と一緒に亀岡の大本本部へ行き、出口王仁三郎に判断を仰ぐと言いつたのである。それから一週間後の一七日、教祖は清水清太郎と正木三雄を連れ、吉川と共に亀岡へ向かった。吉川がお守りやおひねりの一件を述べると、出口は、

「それは信者としてはできない。ワシでさえできないで、三代（大本三代教主）にやらしている。けれども、目立たないようにやってくれればいいだろう。目立つとワシがみなに責められて困る。みながほしがるならやってもいいから、目立たないようにやってくれ。」

と言ったので、吉川はあまりの意外さに黙ってしまった。

この吉川問題により、出口王仁三郎が心中ひそかに教祖の霊格の高さを認め、大本の中でも特別の存在と考えていたことが改めて確かめられたのである。もちろん、吉川のこの行動は、単に本人一人の感情だけではなく、教祖に対する反感を代表するものであった。そして、この時は出口の仲裁で一応収まりはしたものの、しこりは残り、教祖排斥運動は依然としてくすぶり続けたのである。

しかし、一つのまとまりのある組織宗教として活動を続ける大本が、決められた枠以上のみずからの道を歩む教祖に対し、厳しい姿勢をとるにいたったのは当然のことといわなければならぬ。

教祖が大本を脱退する直接の原因となったのは、昭和九年（一九三四年）七月、同教の機関紙『愛善新聞』の配布をめぐってのトラブルからであった。そして事態の成りゆきに憤った中島一斎、岡庭真次郎、清水清太郎、松久茂徳の四人が当時、大本の関東地方の要職にあった某幹部と決定的な意見の対立をみるに及んだのであった。

弟子たちは、くれぐれも自重するようにと常日ごろ注意されていたにもかかわらず、このような不祥事を引き起こしたことを、心から教祖にわびた。教祖は弟子たちの不始末は不始末としながらもそれに合わせ、敏感に事態の変化の背景にある神の働きを感じ取った。そして弟子の失態の責任をとることによって、大本から離れることとし、九月一日に届けを出して、新たな道を歩み始めたのである。

「新宗教弾圧」

教祖が霊界研究と浄霊の確立という独自の道を歩み続けていた昭和初期は、新宗教に対する監視、統制がますます強められた時代である。

わが国の神道は明治一五年（一八八二年）以来、神社神道

と教派神道に分かれ、教派神道としては、天理教、金光教など一三派が公認された。これらの神道は明治三三年（一九〇〇年）まで内務省社寺局の管轄のもとにおかれ、その後、社寺局が神社局と宗教局とに分かれた後にも、それぞれに規制を受けた。

その後に出発をした神道系の宗教団体は、これら一三派のいずれかに所属すれば合法性を認められはするものの、厳しい制約のもとに置かれることとなる。独立の道をとれば、類似宗教として警察の徹底した取り締まりを受ける運命にあった。いずれにしても、そのころの日本においては自由な宗教活動は認められていなかったのである。

しかもその傾向は大正一二年（一九二三年）の特別高等警察の設置と、大正一四年（一九二五年）の治安維持法の成立によってますます強化されていった。この結果、

「国体ヲ変革シ、又ハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的」とするいっさいの結社運動は厳罰に処せられることとなり、やがて昭和三年（一九二八年）特高警察が全国の府県に設置されるに及んで、思想問題、とりわけ新興宗教に対する取り締まりを徹底する体制ができあがったのである。

しかし、治安当局のこれら一連の動きにもかかわらず、民衆の間には新たな宗教を待ち望む根強い期待があった。前述の通り、昭和初年の不景気と、それに続く経済恐慌のため、庶民の生活は苦しかった。失業、倒産、争議などの社会不安が渦巻く中で、民衆は新たな希望のよすがを求めていたから

である。昭和初期に、新しい宗教が、あるいは生まれ、あるいは成長をしていった背景には、それを求める民衆の熱い心があったといわなければならない。しかし治安当局の弾圧はあくまでも苛酷であった。

この時代に徹底した弾圧を受けた宗教に天理研究会（後の「天理本道」、現在の「ほんみち」）がある。教派神道の一派として国家公認の道を選んだ天理教に反発して独立した宗教団体であったが、徹底した理想主義を掲げたことに対して、官憲は黙視せず、動き出した。昭和三年（一九二八年）四月の第一次弾圧では検挙者五〇〇名を出し、うち一八〇名が不敬罪で起訴されている。

昭和一〇年代にはいっても弾圧の嵐は治まる様子もなく、ますます激しさを増すばかりであった。昭和一〇年（一九三五年）には大本が二度目の大弾圧を受けた。また同一年（一九三六年）には、「ひとのみち」教祖・御木徳一が、さらに翌一二年（一九三七年）には同教団の幹部が検挙され、内務省令によって解散を命じられたのである。

次号に続く『東方之光』（上巻）より

NOW

神仙郷



澄みわたる冬空に佇む観山亭



石樂園から望む神山荘



満開の桜と白亜の殿堂



中国に由来するカンヒザクラ



英国生まれのオカメザクラ



日本固有のエドヒガンザクラ



晴天に映えるミモザ

平安郷



梅林の紅白梅



春秋庵前の紅梅

食べたいものを食べる

（株）瑞雲 代表取締役 堀口照正

明主様の食事観を学ぶ上で非常に重要なのは、「食べ物とは、神様が人間を造ると同時に用意された、生きるために必要なものである。私たちが美味しいと感じ、その時に欲するものが、健康に生きるための食べ物である」という教えです。

この神と人間との関係、そして人間の役割について、明主様は「大自然の働きこそが真理そのものであり、その具現者が神であり、宇宙意思であり、大自然そのものが神である。神が地上に天国を造るために、人間を神の代行者として造られた」と端的にみ教えくださっています。

「医学では、安静を最も重要とされているが、これは前に述べたごとく、大変な間違いである。ではどうするのが一番いいかというと、なによりも自然である。自然とは自分の身体を拘束することなく無理のないよう気儘にすることである。例えば熱があつて大儀なときは、寝ろという命令を身体がすると思ひ、寝ればいいのである。また寝たくない起きたいと思うのは、起きるべしと命令

されたと思ひ、起きればいいのである。歩きたければ歩き、駆け出したければ駆け出し、大きな声で唄いたければ唄うがいい。というように何でも心の命ずるままにするのが本当である。気が向かない、心に満たない事は止すことである。要するにどこまでも自然である。これが結核に限らず、いかなる病に対しても同じことがいえる。

食物も同様で、食べたいものを食べたときに食べただけ食う。これが最もいいのである。薬は勿論いけないうが、食物としても薬だからとか、滋養になるとかいつて、欲しくないものを我慢して食ったり、欲しいものを我慢して食わなかったりするのも間違っている。人体に必要なものは食べたい意欲が起るとともに、食べたくないものは食べるという訳である。そうして結核に特に悪いのは動物性蛋白である。少しは差し支えないが、なるべく野菜を多く摂るほうがよい。ところが今日の医学は、栄養は魚鳥獣肉に多いとして奨めるが、これが大変な誤りで、必ず衰弱を増すのである。本来栄養とは植物性に多くある。考えてみるがいい、動物性のもののみを食っていれば敗血症などが起こって必ず病気になる、生命にかかわることさえもある。それに反し菜食はいくらしても健康にこそなれ、病気には決して罹らないばかりか、長寿者となるに見ても明らかである。（後略）

（結核の革命的療法「自然を尊重せよ」昭和26年8月15日）

皆さまはどのように受けとめられたでしょうか。

「食べたいものを食べたいときに食べたいだけ食う」という言葉について、「何を食べても良いのですか？」と聞かれることがあります。この明様のみ教えを、単なる「好き嫌い」や「暴飲暴食」と勘違いすることもできてしまうのです。

現代の私たちが感じている「食べたい」は、本当に自分の体が求めているものなのか、それとも情報に躍らされていただけなのか。「神の代行者」としての食の在り方を、改めて見つめ直したいと思います。

「食べたい」と、自分自身の「本能」が求めているものと、現代社会の「外的要因」によって求めているものを「食べたい」と思い込まされている場合があります。例えば、テレビやネット動画で美味しそうな映像を観て過去の記憶を呼び起こされたり、街を歩いていて肉やパン、お菓子などの香ばしい匂いに誘われたりして、「非常に食べたくなる」という経験は皆さまにもあるのではないのでしょうか。

食べ物が豊かに溢れ、海外からの輸入食品も手軽に入り、それらが産業として成り立つ現代において、私たちの本能以上に「情報に振り回された感情」が求めていることが多くあります。だからこそ、「今の自分が本当に食べたいものは何か」という感覚を取り戻す必要があるのです。食に限らず、あらゆることへの感性を高めていく

ことが大切だと思えます。

では、私たちが本能で欲する食べ物とは何でしょうか。食事をするとき、「私たちは『神の代行者』として、神様が用意してくださっている食べ物を、神様の代わりにいただいたている」。そうした謙虚な姿勢で食べ物を求め、一口一口を丁寧に感謝して味わい、身体全体がどのように感じているかを意識すること。こうした向き合い方が、何より重要なのではないのでしょうか。次回は、このあたりをもう少し具体的に学んでいきたいと思います。

最後に、このみ教えが出された昭和二六年当時、日本の死亡原因第一位は結核でした。その後癌や脳血管疾患が上位となりますが、当時はまだ抗生物質の普及が十分ではなく、戦後の栄養状態や生活環境の影響もあり、結核は「国民病」と呼ばれるほど恐ろしい病でした。今回は割愛しましたが、このみ教えの後半には、明様が菜食によって結核を完治された体験が記されています。このご体験についても、改めて学んでいきたいと思います。



瑞雲郷の木瓜



お雛様

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 94 2026年3月15日発行

世界救世教

明主様と聖地に直結する会

